

＜翻 訳＞

ヨハネス・パウリ：冗談とまじめ（４）

Frühneuhochdeutsch 研究会訳

（代表 森 昌弘）

ここに翻訳したのは1522年刊行の Johannes Pauli: Schimpf und Ernst 第127話—第167話である（第126話までは『中京大学教養論叢』第30巻第4号，第31巻第3号，第32巻第2号に所載）。使用テキストは1924年刊の Johannes Bolte 編（リプリント版1972年）を用いた。聖書に関しては『聖書新共同訳』（日本聖書協会1987年刊）に拠った。パウリの聖書の引用はほとんどすべてラテン語で，時とすると現今の聖書に一致しない場合，あるいは多少記憶違いと思われる箇所もある。それ故彼自身のドイツ語訳と重複する場合も，異同を明らかにするために，煩雑にはなるがすべてラテン語を添えて訳してある。聖書以外のラテン語も同じように扱った。

この翻訳は，Frühneuhochdeutsch 研究会のメンバーが分担して訳したものを，最後に共同で検討修正したものである（訳の分担表は下記）。1992年1月現在のメンバー氏名はつぎの通りである。青木一行（名城大），大沢峯雄（名大名誉教授），木野茂（保健衛生大），工藤康弘（三重大），精園修三（中京大），中条宗助（名大名誉教授），中山淳子（竜谷大），橋本忠欣（福井大），森昌弘（中京大），山田やす子（皇学館大）（以上アイウエオ順）。

分担表

第127話—第129話	大沢	第144話—第147話	森
第130話—第133話	木野	第148話—第152話	橋本
第134話—第135話	精園	第153話—第156話	青木
第136話—第140話	森	第157話—第162話	大沢
第141話—第143話	中条	第163話—第167話	山田

第百二十七話 冗談

弁護人、すべての訴訟に敗けること

こうして、またある時、公証人あるいは代理人と言われる人が法廷に出ていました。この人は訴訟に敗けることはめったにありませんでした。ですから、大勢の依頼人がつめかけて、法廷に何か用件がある人は、この弁護人あるいは代理人をつかまえようと狙っていました。そんな時、弁護人たちは、ただ称賛と名誉を得ようとして、訴訟を起こすのですが、神と真実のことを考えれば、そんなことはできないはずです。「そうだ」と、代理人や弁護人たちは言います。「私は私の側の人々に最善を尽くす義務がある。」確かにその通りです。しかし、自分の側の人々が正しく、良心に疚しいところがないと思う以上、ことは真実を以て行われねばなりません。しかし、代理人あるいは弁護人が、自分の側の人々が正しくないことに気づき、さとしたならば、その人々に手を引くように忠告し、自分も手を引くべきです。ところが、この人々は、最も公正な審判者である主なる神に対してよりも、世間に対して恥ずかしく思い、大地が鳴動するかも知れないなどとあらぬことを言い始め、肉体や魂、さては財産までも呪詛します。しかもまた、もし天国の主なる神の許へ行きたいと思うならば、損害を受けた者にその損害の償いをする責任もあるのです。

閑話休題。この弁護人あるいは公証人は自分の生活を改めようと思い、聖ベネディクト会修道院の修道士になりました。そして、そこの修道士たちが法廷に用件があるときには、修道院長は訴訟に通じているこの修道士を差し向けました。何しろ以前はそれに携わっていて、今は修道院の命による法廷の代理人でしたから。しかしこの修道士は法廷で訴訟に勝つことはめったにありませんでした。ある時、院長はほかのお偉方といっしょにこの修道士に言いました。「あなたは俗界でめったに訴訟に敗れたことがないのに、私たちは驚いている。ところが今はめったに勝つことがない。」修道士は言いました。「そんなに驚かないで下さい。というのは、私は俗界では、大地が鳴動するするかもしれないなどと、あらぬことを言っていました。今はもううそは言いません。そのために、修道会へ入って、我が

身を改め、もううそはつくまいと、思ったのです。」

第百二十八話 冗談

子豚，牛乳を飲みほすこと

一人の貧しい男がおりました。百姓で、法廷に訴訟を起こしていました。弁護人の所へ来て、上等のパン入りスープ、つまり上等の牛乳を贈りました。相手方が来て、乳豚を、焼肉にするのにちょうどいい乳豚を贈りました。判決は、弁護人に牛乳を贈った男に不利でした。そこで、百姓は言いました。「わしの上等の牛乳はどうなりやした？」公証人、弁護人は言いました。「あれは乳豚が飲んでしまった。牛乳よりも乳豚の方が良かった。だからあの男の方がお前さんより正しいのさ。」

三百代言や弁護人は天秤と同じです。天秤には、両側に一つずつ、二つの皿があり、上に舌（指針）がついていて、それがいつも重い方に傾きます。そのように、弁護人にも手が二つあって、両腕を広げると、天秤と同じように、上の方の口の中に舌があります。そして、あなたが一番多く載せる手の方に舌は下がります。あなたが左手に一ポンド載せ、それから右手に二ポンド載せれば、舌は右手の方へ動きます。そのあとで右手に三、四ポンド載せ、それから左手に五、六ポンド載せれば、舌は左手の方へ動きます。こういうわけで、予言者が「Isaie 1. Omnes diligunt munera.（イザヤ書第一章 万人が贈り物を好む。）」と言っているのは、全くその通りです。

第百二十九話 まじめ

人を刺し殺して罪にならなかった男のこと

一人の貴族の話ですが、この貴族は町の役人、裁判官で、何人をも容赦せず、神の正義を求める声に従う人でした。ある時、病気になりました。ベッドに寝ていると、一人の娘が叫ぶのが聞こえました。貴族は、通りかかった下男の一人に、あの娘はなぜあのように叫んだのか、わけを知りたい、と尋ねました。下男は言いました。「旦那様の甥ご、つまり旦那様の弟の息子さんがあの娘を馬鹿にしてからかったのです。」云々。貴族はそれをよく了解し、パン切りナイフを取って、枕の下に隠しました。ある時、貴

族は、甥が部屋の前を通り過ぎるのを見て、呼び止め、そばへ来るように言いました。甥はそばへ来ました。すると、貴族は甥を自分の胸に押しつけ、ナイフを背中から心臓まで突き刺して殺し、死体を押しつけて、埋葬するように命じました。

さて、貴族は病気が進み、告解と秘蹟を求めました。司祭が来て、告解を聞きました。貴族はいとも敬虔に告解しましたが、殺人のことには触れませんでした。司祭は、犯した殺人のことも告解するつもりはないのか、と言いました。貴族は言いました。「私はそれを罪だとは思っていません。それについて何を告解せよと言われるのですか。」司祭は言いました。「では、あなたに秘蹟を授けるのはやめよう。」貴族は言いました。「私は憎しみからああいうことをしたのではない。あの子ほどかわいい子はほかにいなかった。罰としてしたことです。」司祭は貴族に秘蹟を授けようとはしないで、それをまた持ち去りました。そして、戸口の所まで行くと、貴族は司祭を呼び戻して、言いました。「お坊さん、私の口の中を見て下さい。」舌の上には秘蹟が載っていました。貴族は言いました。「あなたが私に与えようとしなかった人、その人は自分で自分を私に与えたのです。」

これを見ても、神は公正な裁判官に好意と愛情を持っていることが分かります。

第百三十話 大まじめ

公爵、ヨザファートの谷へ招かれ、実際そこへ出かけたこと

同様に、嫉妬と憎悪から判決を下す公正ならざる裁判官は、神のお気に召さないものです。フェリクス・ヘメルリーンは、ルードルフ公と呼ばれる、オーストリアの公爵について書いていますが、その公爵はある騎士を憎んでいて、その騎士をひそかに捕らえさせ、袋の中へ押し込み、溺死させたのです。その時公爵は、ある建物の窓辺に立ち、騎士が袋の中へ押し込まれ、橋から投げ落とされるのを見ていました。騎士は足ごと袋の中に入れられた時、大声で叫びました。「ルードルフ公よ、おまえをヨザファートの谷の恐ろしい神の裁きの座へ引き出してやる。おまえは、どうして俺をこのように時間のかかるむごいやり方で殺すのか、一年後には返答してもらおうぞ。」公爵はあざ笑って言いました。「では、あばよ。俺も行くから

な。」こうして騎士は橋から投げ落とされました。

さて時は巡って、ちょうど一年目の日がやって来た時、公爵はあるお城で楽しく過ごそうと、馬でやって来ました。食事の後、ちょっと悪寒がし、少し熱が出ました。すると公爵は言いました。「わしの命はもうない。わしは裁きの場へ参らねばならぬ。一年がやってきたのだ。」

ああ、神の裁きは、公正ならざる裁判官に何と厳しいことであろうか。公爵は騎士に回答を与えるために、突然直ちにあの世へと旅立ったのです。だから、このような招きを侮ってはなりません。この短い著作では、公正ならざる弁護人や裁判官について書く余裕はないのです。書くとなれば、それは一冊の独特な書物となりましょう。

第十二章 結婚生活の厳しい秩序について 尊敬すべきご婦人たちについて

第百三十一話 冗談

二つの壺を窓から投げ捨てた女のこと

ある男が、哲学者の所へやって来て言いました。「先生、私は若輩の夫ですが、うまく家が治められるようお教え下さい。」哲学者は言いました。「私の家へついて来るがよい。」哲学者は家へ帰ると、下の階段の所に立ち止まって、妻を呼んで言いました。「一番大きいオリーブ油の壺を取って、窓から外へ投げてくれ。」妻はその通りにしました。哲学者は言いました。「他の壺を取って、それも窓から投げてくれ。」その後ソクラテスは、若い夫に言いました。「さあ、家へ帰りなさい。あなたの妻を、私の妻と同じように従順に教育すれば、家はうまく治められます。」

夫たちは今や妻たちが支配者だと言います。かつては夫たちが支配者とされたものなのに。だから夫たちは、妻たちの願いを満たしてやらなければならないのです。妻たちは、背中まで切り込みのある襟ぐりの深い衣服を着て、黄色のヴェールを被り、娼婦好みの靴を履いて、まるで娼婦のように自分の好みに合わせてめかしこみます。夫は、それを止められないのでしょうか。いいえ、夫が家で喧嘩をし、ろばが雌らばの前に横になるように、妻のベッドの傍らに横になるつもりならば、それを止められるの

です。

第百三十二話 冗談

三十年間気持ちが合わなかったこと

ある時一人の百姓が、名望家の方々の傍らで食卓についていました。すると話は、結婚生活で人々がどんなふうになつたり、仲違いするかということになりました。百姓が言いました。「私は結婚してから三十年になります。最初の日を除けば、私と妻の意志や気持ちが一致したのは、只の一回だけでした。それは家が燃えた時でした。その時はどちらも、家の戸口から真っ先に飛び出そうとしました。」

妻の方も、もちろん三十年間決して夫の髪をとかす事はありませんでした。そこで夫は、旅立ちにあたって妻に別れを告げることもなかったし、妻は、夫が戻って来た時に、夫を歓迎することもなかったのです。

第百三十三話 冗談

三人兄弟の妻たちが仲直りしたこと

テレンティウスは言っています。「*Omnes nurus oderunt socrus.* (嫁というものは、みな姑を憎むものです。)」息子の妻というものは誰もが、夫の母親つまり姑を憎むものです。しかし二人兄弟の妻たちが一緒にいると、決して平穏ではありません。ここで読むのは、三人の兄弟がある村で一緒に暮らし、それぞれ妻があつて、妻たちはほとんどいつも仲違いしていたお話です。ある時祝日が続くことがありました。一番上の兄が妻たちに言いました。「わしも弟も畑へ出かける。おまえら妻たちは、わたたちが祝日の間ずっとパンを食べられるように、パンを焼きなさい。一番下の弟は、朝食が終わったら後から来ることになっているから。」二人の兄たちは揃って畑へ出かけました。妻たちの間に口論が起きました。一人が言いました。「私はこの間焼いたばかりです。今度はあなたが焼きなさいよ。」同じ妻が言いました。「あなた、焼きたくないなら、止めなさいよ。」こうして罵りあいになりました。まだ家にいた弟はとても腹をたて、棍棒を取り、最初に自分の妻を殴り、その後二人の妻も殴って、それもかなり強かに打ちすえ、その後畑にいる他の兄弟たちの所へ出かけ、兄たちに事の次

第を告げ、自分が兄たちの妻を殴ったために、兄たちが腹を立てはしないかと気づかいました。一番上の兄が言いました。「わしは家へ行って来る。妻たちがそれでもまだ喧嘩をしていれば、わしも同じようにするつもりだ。」一番上の兄は、言葉通り実行し、妻たちをまた殴りつけ、再び畑に戻って来ました。もう一人の兄も家に戻って、同様に振舞いました。こうしてどの妻も三回殴られ、一人はこちらの隅に、ほかの者はあちらの隅にと腰をおろし、泣いていました。三人の中の一人が言いました。「本当に情けない。私たちって何という女なんでしょう。誰も他の人より先に行おうとしないなんて。結局やらなければならないし、おまけに殴られなければならないのだから。夫たちは本当に正しいのだわ。」その女は、他の女たちに言いました。「いがみ合いはやめましょう。助け合って焼きましょう。」他の女が言いました。「おっしゃる通りだわ。」別の女もそう言いました。そこで女たちは和解の食事をする事になり、煎餅や菓子を焼き、一緒に食べました。こうして夫たちが戻って来る少し前には、料理が作られました。女たちは最上の樽の口を開け、夫たちが戻って来る前に、みんなご機嫌でした。

兄弟の一人が、他の二人の兄弟に言いました。「おい、俺たちは妻を殴ってしまった。女たちは、俺たちのために何も料理しないだろう。遅くならないうちに帰ったほうがよさそうだ。女どもが、俺たちのために何も料理していなかったら、自分たちで料理したらいい。」男たちはみなそれに賛成して揃って帰宅し、家の前で妻たちがどんな様子か密かに窺いました。女たちは、テーブルにつき、とても調子よくやっていました。兄弟たちは女たちに言いました。「おまえたちが一緒に和解の食事をするのなら、俺たちもおまえたちと一緒に和解の食事をしよう。」こう言って、さかんに料理を追加し、若鶏や自分たちが食べたい物を煮たり焼いたりしました。こうして夫たちも妻たちも一緒に食事をしました。その後夫たちと妻たちは、もう仲違いすることはありませんでした。妻の一人が願う事を、他の妻も願いました。妻たちはこんなふうに互いに助け合い、とても仲睦まじくなり、夫たちとも仲違いする事はなかったのです。

このように、もし人が何かをなさねばならぬ事を知ったならば、それを喜んでなし、災いを転じて福としなさい。フランシスコ・ペトラルカが、

「Si non vis cogi, volens facito. (強制されたくなければ, 自らなすべし。) 行くことを強いらるるを望まざれば, 喜びて自ら行くべし」と、言っているごとく。

第百三十四話 冗談

悪女を大人しくさせること

ソロモン王の時代, 使徒言行録によれば大斎のおり, その頃王は二人の遊女と一人の子供にまつわる判決を下したのですが¹, 当時王の知恵をたたえる声は国々にゆきわたっていました。そして日に数時間は王が何人にも引見し, 聴許することになっていました。訴人が王に事の次第を訴え, 王が答えるとき, 王は短く答えるのですが, その時甲冑に身を固めた兵士や下僕も配されていました。というのは訴人が王に問い続けようとしみますと, 下僕たちが現れて, 訴人を王から引き離し, 戸口から出て行くように命令し, 別の訴人をなかへ入れるのでした。ある時男が一人やって来て, 本人が申し立てるところによれば, 男の女房はこの上なき悪女だと訴えました。王は言いました。「In verbis, herbis et lapidibus est magna virtus. (言葉, 薬草そして石のなかに大いなる力が宿る)」と。男がその言葉をどう理解したらよいのか尋ねようとしみますと, 下僕たちが現れて, 男を王から引き離し, 戸口から外へ連れ出しました。

男は王の言葉を考えてみて, その三つ全部を試そうと思い, まず『言葉』を試してみました。男が帰宅しますと, 女房はいつものごとく悪口雑言を吐きながら出迎えました。男は女房に最上級の甘い言葉を並べました。しかし男が女房にやさしい言葉を並べれば並べるほど, 女房はますます猛り狂いました。本当の悪女の本性とはそういうものなのです。男はこう思いました。「『薬草』も試してみよう。」そこで市場へ出掛けて行って, 二十ペニヒで二十束の薬草を, マンネンロウ, サルビア, マヨナラ, ヘンルーダ等あらゆる薬草を買い, 腕にかかえて, 家に持ち帰りました。そして男が家のなかに入りますと, 女房がまたぞろ悪態をつき, こう言いました。「お前さんはこんなつまらぬものにしかお金の使い道がないのかえ。」そこで

1 この話は新約ではなく, 旧約の「列王紀上」, 第三章十六―二十八節にある。

男は女房をつかまえ、部屋の隅に押しつけて、薬草の束を次々と鼻先に突き付けましたが、どの束も女房を大人しくさせる効果はありませんでした。

男は『石』も試してみようと思いました。ある時自分がどやされることがよくわかっていたときのことでした。男は外出して、懐と袖を小石で充たし、それを持って家のなかへ入って来ました。女房がまたもや男に悪態をついて、こう言いました。「悪党、ならず者、その石をどうしようってんだい。」男は効き目のありそうな石を一つとって、それを女房の胸に投げつけました。そこで女房は悲鳴をあげ、こう言いました。「人殺し、私を殺す気かい。」男は石を一つづつ次々にとって、女房に投げつけました。そこで女房は戸口から外へ走り出しましたが、男も女房のあとを追って石を投げ続けました。女房はこう思いました。「今日は殺されるかもしれない。」そこで廻れ右をし、男の前の地面にひれ伏して、悔い改めて、かかることは二度としない、と詫びました。そこで男は投石を止めました。その後その女房は夫と平和に暮らしました。そこで男が言いました。『言葉』、『薬草』、『石』のなか、それぞれに力が宿っていよう。しかしより大きな力が宿っているのは『薬草』や『言葉』のなかではなく、『石』のなかであることを私は王に証言したい」と。

結婚生活には愛と平和が必要です。さもないと幸福も平安も訪れないでしょう。

第百三十五話 冗談

女房たちが怒りっぽく気むずかしい夫を気さくな人柄にする方法のこと

ある女房の夫は大変気むずかしい人でした。そこで女房はある老婆のところへ行きました。この老婆は家畜の病気のこととか、紛失物のこととかで、何人かの人を助けたことがありました。女房はこう考えたのです。「この人はいろいろなことができる。もしかしたらこの人は私の夫を気さくな人柄にする方法を教えてくれることができるかもしれない。」女房はその老婆のところへ行って、自分の悩みごとを訴え、助けて欲しいと言いました。老婆は言いました。「私は助けてあげられないが、どこへ行けばそれがわかるかを教えてあげることはできる。しかしちょっと費用がかかるよ。」

女房は言いました。「あら、そんなことかまいませんわ。どうすればよろしいの。」老婆が言いました。「日曜日の朝早く、町の門があいたらすぐ、郊外の麻畑へ行きな。そこに例の木¹があるから、その木と物を投げて届くだけの距離をとりな。そしてベーコンを三個もって行くんだよ。大きさが違うのをさ。一つは一ポンド、もう一つは三ポンド、最後のは五ポンドのをさ。それらを一つずつ投げて、その都度こう言うんだよ。『アルラウン様²、お願いでございます。私の夫を気さくな人柄にしてくださいませ』と。それでもアルラウン様が御返事をくださるのは三度目だけだよ。」

さて、女房は言われたとおりにやってみようと思いました。一方老婆は前もって郊外へ出て、女房に指示しておいた例の木のうしろに腰をおろしました。女房がやって来て、老婆が命じたとうりにしました。そして女房が、「アルラウン様、お願いでございます。私の夫を気さくな人柄にしてくださいませ」と三度言いますと、老婆は木のうしろでこう言いました。「家に帰って、旦那に言われたとおりにしな。どこへ出かけても、すぐ帰りな。そうすれば旦那は気さくな人柄になるよ。」こうして老婆はベーコンを手に入れました。老婆がアルラウン様だったのです。

どんな女房でも上の事柄を守っておれば、夫がよほどの喧嘩好きか、悪党でもないかぎり、気さくな人柄になると私は思います。どんな夫でも、いかに善良で、温順でありたいと思っても、もし女房がその三つの事柄を守らないなら、夫は女房に腹をたてるにちがいありません。第一の事柄をアルラウン様は「夫に言われたとおりにしなさい」と言いましたが、これは女房が夫に、夫が女房に行く義務のある夫婦の営みのことを暗に言ったのであり、若干の女房がやっているように、またドミニコ会の聖ヴィンセンティウス³が書いている次の話の女性のようにはするな、ということです。

1 当時多くの町のはずれにあった絞首刑の木と思われる。

2 原文は Alrun, Alraun, Alraune とも書く。Mandragora とも言い、東洋に起源するなす科の植物。その根が人体に似ていることから、幸福、健康、富をもたらすものと信じられた。信仰の対象としては、女性像と男性像の両方がある。

3 Vincentius Ferrerius (1350-1419) スペインの大衆的巡回説教師、聖人。

第百三十六話 冗談

夜毎口実をもうけた女のこと

ある婦人がいましたが、狂信的な女性で、夫が夫婦の営みを求めると、いつも口実をもうけて断りました。土曜の夜は適当ではない、日曜は聖なる三位一体の日であるとか、月曜は万霊の日、火曜は全天使の日、水曜はキリストが売られた日、木曜は主が血を流された日、金曜は主が亡くなられた日などと言いました。夫は、「どうしたらいいのだろう」と考えました。そして娼婦を呼び寄せて、部屋に二つのベットがあったので、彼女を自分のベットに寝かせました。するとこの妻がやって来て、ほとんど怒り出さんばかりにこの娼婦を殴ろうとしました。夫は言いました。「おい、お前は聖女で、おれたちは哀れな罪人だ。だからお前がおれたちから離れてくれ。」それからは、この婦人はもう聖なる日を言い立てようとはしませんでした。

これ以上このことについて話すのは、告解で行うべきことです。同様に次に大事なことは、妻はどこに行こうと、早く帰って来なければならないということです。ある女性が桶を持って水汲みに出かけねばならなくなると、二時間は帰って来ません。夫はどう考えたらよいでしょうか。アルラウン様は、「第三は黙っていることだ」と、申されています。夫が少し怒り出したら、妻は黙っているようにしなさい。そうすれば夫は間もなく穏やかになります。しかし一言言えば二十やり返し、いつも言い負かそうとすれば、喧嘩ばかりになります。彼女らは、「ええ、女には舌以外に武器はありませんからね」と言います。それで鞘、つまり舌の剣を収めている口が打たれるのです。多くの男性は、自分の妻の舌に我慢ができないので、いく人かの人、真剣に女性の舌を罵っています。

第百三十七話 冗談

妻の舌は、魚の尻尾のようで、食べると健康によいということ

一人の市民が病気になり、医者がこの人に豚肉、牛乳、魚、果物などを禁じました。するとこの市民が言いました。「魚以外なら、すべて避けることができます。私は漁師なんです。」医者は言いました。「尻尾の所は食べ

てもいいことにします。尻尾は水の中でいつも動いていて、身体にいいからです。」この市民は言いました。「そうすると、私の妻の舌は、食べてもいいのですね。いつも動いています、昼も夜も動いていますから。」そして医者言うことには従いませんでした。

第百三十八話 冗談

一番重いものは、妻の舌であるということ

ある時、ある人が妻と一緒に船に乗りました。船は荷を積みすぎたので、それぞれが持っているものの中で、一番重いものを一つずつ、船から投げ捨てなければなりません。順番がこの人になった時、彼は言いました。「私が持っている一番重いものは、妻の舌です。私でも、近所の人全部でも、あの舌には我慢できないのです。」

第百三十九話 冗談

ある人が妻に書き付けを渡したこと

昔、一人の男がいましたが、まじめな妻を持っていました。この妻はこの男に対し、卵に殻があるように振る舞い、夫と仲良く暮らすために、きちんとするのが好きでした。しかし夫は片意地な小作人で、何事も善意に考えようとはしませんでした。妻は言いました。「あなた、きちんとやれるように、私がやらねばならないことを書き付けに書いて下さい。」夫は、「そうしよう」と言って、そのようにしました。ある時、二人と一緒に教会の献堂式に出かけ、ある村の友人を訪ね、いい気分でした。夫は自分の適量以上のワインを詰め込んだので、酔っぱらっていました。さて二人は家へ戻ろうとしましたが、途中で板の橋を渡って、小川を越えて行かねばなりません。この夫は橋から落ちてしまい、叫びました。「おいお前、助けに来てくれ。」妻は言いました。「その前に家へ戻って、あなたを助けねばならないのか、書き付けに書いてあるかどうか、見て来ます。」こうしているうちに、水が口の中に入ってきたので、彼は自力ではい上がりませんでした。彼は家に帰ると、妻に渡した書き付けを引き裂いて言いました。「自分で正しいと思ったことをやれ。」そしてその後、二人は仲良く暮らしました。

後に出てくる犬の寓話（第四百二十九話）から、もっと沢山の教訓を探して下さい。

第百四十話 冗談

一つのものが二つに見えた男のこと

ひどい目にあって利口になり、妻と仲良くなった今の話に、非常に似た別の男の話です。一人の男がいましたが、酔っぱらって家に戻ってくると、家の中で見るものは、なんでも二つあるように思えました。ある時、酒を鱈腹飲んで帰って来ました。彼の妻は座って糸を紡いでいましたが、ろうそくを一本つけていました。すると夫は言いました。「ろうそくは一本で十分じゃないか。二本もろうそくをつけなければならんのか。」妻は言いました。「ろうそくは一本しかありませんよ。私を盲にするつもりですか。」別のある時、彼が帰って来ると、二人の子供が部屋の中を走り回っていました。夫は言いました。「そこを走っている、もう一人の子は誰の子だ。」妻は言いました。「私たちの子供のほかは、ここにはいませんよ。」

ある日曜日に起こったことですが、彼が夜酔っぱらって帰って来ると、家では晩御飯を食べようとしていました。彼が台所へ行くと、肉を入れた深鍋が火のそばにありました。夫は言いました。「豪勢だな。もう一つの鍋には何が入っているんだ。おれには鍋がそこに二つあるように見えるが。」すると妻が言いました。「鶏を一羽おいしく煮たんですよ。片方の鍋を取りますから、あなたはもう一つを取って下さい。」妻は右側の鍋をつかみ、夫はもう一つに手を伸ばしてつかみました。すると手を火の中に突っ込んで、手にひどい火傷を負いました。その後はもうものが二つに見えることはなく、妻と仲良く暮らしました。

第百四十一話 まじめ

ローマ人の婦人が子供の自慢をしたが装身具の自慢はしなかったこと

ローマに名をコルネーリアと呼ぶ婦人がいました。立派なアフリカ人の娘で、この婦人のもとに別の立派な婦人が訪れて、そこで一晩泊まりました。この婦人はコルネーリアの傍らに腰をおろして、美しい指輪をはめていました。コルネーリアはそれをじっと見て誉めましたが、この婦人は尚

も誉められたいものと思い、袋を開けて中からきれいな装身具や高価な宝石のはまった指輪や異教徒風の黄金の腕輪を投げ出しました。この婦人は全部見せたのですが、こうしてコルネーリアに自分の宝石類も見せるようにそそのかそうと思いました。そこでコルネーリアは息子や娘たちが学校から帰るまで話を引き延ばしていました。子供たちが帰った時、コルネーリアは子供たちを自分の前に順に立たせましたが、その数は十人か十二人でした。子供たちは下から順に背丈と年齢に従って並びました。かつては小さかったが今では立派に成人していました。さてコルネーリアは例の婦人に言いました。「この子たちは夫が私に与えてくれた宝物です。」

このように母親たる者は、子供たちに誇りを求め、彼らが高潔な人間になるよう礼儀や規律を教えるべきです。しかし母親たちは、指輪やロザリオや神羊像などを自慢します。およそ婦人は、珊瑚のロザリオを覆う前に、マントのために五十エレもの布地を持たねばならないでしょう。婦人たちはいつでもロザリオを胸の前に出して、ぶら下げるにちがいありません、人が見るにちがいないからです。ロザリオに添えて、小さな鏡がその中に組み込まれた神羊像を持てば、婦人たちは御祈りする時、それを覗き、口を開き過ぎていないか、なおその前に少し笑って、飾りがどれ位自分に似合うかを見るのです。また彼女らのために書かれた、祈りのための本を持てば、彼女らは多分神の事より著者のことを思います。それから僧侶たちは、恐らく平修道女や、尼僧たちや若後家の腕や胸にロザリオを探しかねません。鏡なんかくそくらえだ。

第百四十二話 冗談

悪妻が後ろへ身をすさること

全くひどい反抗的な女房がいて、夫が言い付けた事の反対ばかりやっていました。夫はこの女房から離れる為に考えをめぐらしていました。そこで夫は庭の中での食事をととのえて客を招きました。その庭園に沿って大きな川が流れていて、夫は食卓を川のすぐ傍にすえて、女房が座るはずの椅子を川の流れに背を向けるように置きました。さて素晴らしい食事の最中に夫が妻に言いました。「ねえお前、もっとテーブルに近寄りなよ。」「はいよ」と妻は言って、椅子ごと後ろへすさりました。夫がもっとこちらへ

寄れと言うたびに、妻は後ろへすさり、とうとう川に落ちて溺れました。人々が熊手や鍬を持って下流に沿って女房を捜しました。夫はその場へやってきて言いました。「なぜ皆さんは妻を下流に探すのですか。上流をお探し下さい、うちの女房は生涯、ねじけて、旋毛まがりでした。だから妻は死後もむろん反抗的です。他の人々なら下流へ流れるのですが、あれは逆に上流へ流れますよ。」

このように召使いにも夫にも、また誰にも手のつけようのない愚妻、アーデルハイト¹のような女がいくらかいるものです。冬になって、気のおけない仲間や組合の者たちが一緒に集まることがよくあります。そんな時亭主が、「ねえお前、わしは今晚仲間たちのところへ行くことになっている。みなが招待してくれたのだ」と言うと、女房は、「そっちへ行ったら良いでしょうよ。どうせお前さんは私の側にいるのが嫌だ位のこと分かりますよ」と言います。亭主は、それなら家にいて出ないよと言います。そこで食卓について食事をし、女房は思った通りに亭主が御機嫌にならないと、女房は、「組合の部屋にいれば万事よかったですでしょうに。あんたはいつも組合の部屋のことばかり考えているんだから」と言います。それから亭主が一日中の仕事を終わって、仲間たちと寝酒の一杯も引掛けようと、こっそり戸を開けたてして出掛けると、女房は言います。「ほうら、うちの宿六め、泥棒みたいに出掛ける。縛り首になりたいんだ。」それから堂々と出掛け、戸を勇ましく閉めて窓がビリビリ鳴る程だと、女房は、「まあ、なんという戸の締め方だ。あいつは怪しからんことでも考えているな。」と言います。どんな風にやっても、どうも具合が良くないのです。

第四百十三話 冗談

隣の女房が両手に火傷したこと

ある村に二所帯の隣人がいました。その二人の女房は互いに犬猿の間柄でした。そして互いに相手に意地悪をしいました。二人は信心深い女であったが、意地悪で喧嘩好きでした。この隣合った家は、裏にそれぞれ庭を持っていました。例えば家の掃除するとき、一方の女房が掃除をして家

1 14世紀に die böse Adelheit という、作者不明の Märe がある。

の中の塵を集めて、隣の庭の中へそれを投げ入れました。すると隣の女房が出て来て両手でそれを隣の庭へ投げ返しました。この二人の女はこれを長い間やり合いました。一方の女は、どうして腹癒せしたものかと考えました。ある時その女は、熱い灰の入った桶の中へ焼けた小石を入れておきました。隣の女房が庭に出た時、彼女は熱い石を持って行って、垣根越しに隣の庭の中へぶちまけました。この物音を聞いたお隣さんは、すぐさま走り寄って、以前よくやったように、素手で熱い灰の中へ手をいれ、熱い石で両手に火傷しました。その女房は指に唾を吐きかけ息を吹きかけ、火傷した人がする通り、「アチチチ……」と叫びました。それ以来このお二人は、もう隣の庭の中へ何も投げ入れませんでした。

フランシスコ・ペトラルカは、あらゆる妬みは、隣人の間だけに起こるもので、遠く離れた者たちの間には妬みは無いものだと語っています。このことは国王の間によく見られます。フランス王はシリア王を憎まず、なんの害も及ぼしません。ところが例えばスペイン王、イギリス王その他隣の国王どもをフランス王は憎みます。そして自分が最強力の君主でないことに、フランス王は機嫌を悪くします。国王たちは互いに腕を貸し合って事を行いますが、互いに仇敵で、ある王は他の王の富に耐えられません。だから王侯の血は悪い腸詰めを作り出し、互いに永くは並び立たないので、参事会のある誰かが国王か皇帝のもとに、または会議に派遣されることになる、似たような事になります。その人よりも如才のない者がすっと立ち上がり、派遣される筈の者が止めさせられると、彼はその人を憎みます。その人が側にいるからで、もしその人が他の町にいればその人を妬みません。我々聖職者の間でも事情は同じです。もしも立派な説教家が、私から四十マイル程も離れた所にいるならば、私は彼を憎まないでしょう。しかし若しも一つの町の中で私の側に立ち、私の邪魔をし、私の榮譽を損なうことをすれば、私はその人を妬むでしょう。

婦人の間でも同じで、ある街に美しい女性がいれば、人々は喜んで見ます。実際美女を見たり、居間の中にきれいな暖炉を眺めるのは楽しいのと同じことです。だから一軒の家の中に醜い女がいる場合には、きれいな暖炉が中であってほしいものです。他所からその家へ人々が来て、その出来の悪い女を見たら、その人たちはすぐさま暖炉の方に向きをかえ、「こいつ

は確かにきれいな暖炉だ」と言います。そしてもし一人の美女がケルンに、もう一人がシュトラースブルクにいれば、二人は妬みあいません。しかし一人がもう一人の美女の側にいて、人がその美女以上にもう一人の女を誉めると、この二人は互いに仇敵になります。だからお隣さんとは仲良くして、努めて自制し自分に不快なことをしかけてくる者たちを大目に見てやりなさい。

お隣さんなどの人柄が知りたければ

その二、三人を怒らせたらい。

第百四十四話 冗談

自分の死後、妻がどうするか知りたかった男のこと

昔、一人の婦人がいました。この婦人は非常に優しく夫に振る舞って、いかに愛しているかを示し、常に夫にそうに言っていました。そして夫の死には耐えられないから、彼が死にそうになったら、夫より先に死にたいと言いました。夫は考えました。「おれが死んだら、あいつがどうするか知りたいものだ。」ある時、彼女は一人で大洗濯をしていて、十時の鐘がなるまで家を空けており、朝からまだなにも食べていませんでした。夫は彼女が帰って来るのを見ると、部屋の中で横になって仰向けになり、死んでいるかのように両手を伸ばし、息を殺していました。女房は帰って来て、驚いて呼びかけましたが、彼は答えようとはしませんでした。彼女は、夫の手を彼の心臓の上に置きましたが、その手は硬直したかのように、また下に落ちてしまいました。それで彼女は、夫が急死したのだと思い、心の中で考えました。「どうしたらいいんだろう。大声を上げるんだろうが、まだ衣類も濡れてるし、朝食も食べていない。先ず乾いた服に着替え、朝食を取ることにしよう。」この女は乾いた服に着替え、卵のパンケーキを焼いて、それをすっかり食べ、さらに前の晩の塩漬け肉の残りを一切れ食べました。食べ終わると喉が乾きましたので、半マース入る缶を取り、地下室へ飲物を取りに走って行きました。入れ物が一杯になる前に、誰かが激しくドアを叩いたので、飲む暇がありませんでした。彼女は地下室から走り出て、ワインを入れた缶を階段に置いてドアをあけると、隣の奥さんが立っており、こう言いました。「家を閉めてしまってどうしたんですの。具

合でも悪いんですか。」するとこの女は泣き始め、主人が突然亡くなったと言いました。それで近所の人々も走ってきて二十人ほどになりましたが、すべて死んだ男の周りに立って、それぞれが自分たちのどうでもよいことを話していました。この女房は言いました。「ああ、あなた、私はなんて不幸なんでしょう。どうしたらいいの。」そして両手を絞るようにして悲しみました。夫は、「いたずらは十分だ」と考えて、起き上がって言いました。「おい、朝飯を食べたんだから、飲むことの他にはやることはないんだ。どっちにしろ、半マースの缶を地下室の階段に置いてきてるんだ。」こうして周りに立っていたすべての人々の悲しみは、喜びに変わり、この男は妻がどんな風に振る舞うかが分かりました。

自分の死後、妻が何をやり始めるのか、知りたい人々はもっと沢山います。フランシスコ・ペトラルカは言っています。「彼女は静かに貞節を守るか、別の男と結婚するだろう。後どうするかは、再婚した男に心配させなさい。彼女が生きている間、あなたに貞節であれば、まじめな女性の務めを果たしたことになる。」しかしあなたは、ヴェルギールが言ったように、「妻たるものは、あなたの遺骨 (gelido cineri 冷たい灰) に貞節でなければならぬ」と、言われるのでしょうか。夫がまだ生きているうちに、心の中で他の男を受け入れる淑女も沢山います。そればかりかこの女たちは、夫が死んでくれることを考えています。その夫よりきれいで、貞潔で、金持ちの男を、あなたはどこで手にいれようというのでしょうか。しかも考えることには税がかからないといわれるように、彼女らの名誉は何一つ損なわれないのです。どんなにしても夫は、妻の考えを押しとどめることはできないのです。

第百四十五話 冗談

妻に考えることを禁じた男のこと

この話は、自分の妻に何も考えてはいけないと、考えることを禁止した男の話です。ある時、彼女は夫が不在の折、鶏を1羽焼いて一人で食べ、わざと鶏の脚を食卓に残して置きました。夫が戻ってきて、その脚を見て言いました。「おい、鶏を少しはおれに残して置いたろうな。」妻は言いました。「あなたは、私に考えることを禁止しました。ですから、あなたのこ

とを考えてはいけないのです。」こうして夫は、この禁止することを止めにしました。

自分の死後、妻がどうするのか知りたがっている夫は、沢山います。夫たちは、自分がまだ生きており、家の中で妻のそばにいる間は、妻が何をするのか知りません。一緒にいる間は、お互いに大きな愛情を示しあっていますが、死後はすぐに愛情はなくなってしまいます。愛情が非常に冷たくなる前に、別の男を持ったり、別の女を持ったりするのです。

第百四十六話 まじめ

妻の亡霊は夜夫を苦しめ、妻の父は昼間苦しめること

昔、一人の騎士がいました。この騎士は、言葉や行為で妻に大きな愛情を示しました。この妻が亡くなるということが起こりました。そして間もなく、騎士は別の女性と結婚しましたが、彼が彼女の傍らに横になった最初の夜、なにかが歩く音が聞こえ、彼の布団がはぎ取られました。騎士は不快な気分になって驚き、十字を切って言いました。「お前はなんだ。」霊は言いました。「私はあなたの前の妻です。あなたが私の愛情をすぐ忘れ、別の女と結婚したことを罰するためにやって来たのです。まだ生きている私の父は、あなたを苦しめ、あなたと戦うに違いありません。それで私は、新しい妻があなたの愛しい人にならないように、あなたを夜悲しませ苦しめるのです。」その通りになりました。

主なる神もまた、私たちにこの様にし給うのです。神はわれわれによってのみ愛されていようとされます。私たちが色事や他のことに、新しい愛情を求めると、神はペストや飢饉、貧困によって、日夜私たちを不安にし、夜は不快なものが夢に現れて、私たちを不愉快にするのです。

第百四十七話 まじめ

自分の妻を、私の喜びと名付けた男のこと

昔、一人の男がいました。この男は妻を非常に愛し、自分の喜びと名付けるほどに愛していました。男は参事会から帰ると、あるいは家に戻ると、「私の喜びはどこにいるのか」という言葉以外は、口にしませんでした。ある時、この男がしばらくの間、遠くに出かけて不在のことがあった折に、

この妻は別の男を愛するようになりました。他人のことはすぐ気がつくから、この男の仲間が、彼の妻が家をどのように取り仕切っているかを書き送りました。「色事は三月以上隠しおおせない」という、諺があります。女中か侍女がそれを知るに違いないのです。隠し方が問題になりますが、あなたが丸めこんでも、女は一人であるのでなければ、やはり黙ってはいません。

この男が戻ってくると、妻は腕を広げて走って出迎え、夫に抱きつかうとしたりして、歓迎の仕草をしました。男は抱きつかれないようにして、こぶしで彼女を押し離し、よそよそしく彼女から離れて言いました。「奥さん、あなたはどなたですか。」妻は言いました。「あなたは私を知らないのですか。」夫は言いました。「知りません。」妻は言いました。「私はあなたの喜びです。」夫は言いました。「あなたが私の喜びであった間は、あなたをよく知っていました。しかしあなたが別の人の喜びになったのなら、もうあなたのことは知りません。」

この例は、おとめたちについての聖なる福音の言葉（マタイによる福音書 二十五）、Niscio（私は知らない）、私はお前たちの何も知らないという言葉をを説明してくれます。

「神は二つの道で人間をよく知りたもう」と、ニコラウス・デ・リラ¹は言っています。Est noticia cognitionis et approbationis.（それは認識と是認の印である。）神は人間を知的に知り、また好意を持っておられます。神は、人間をすべて知識により知的に知られます。私たちが誰であるか、どのようなか。しかしすべての人間が歓迎されるほどに、神が好意を持たれているわけではありません。神のなされることは、是認なのです。そのようにこの商人は、自分の妻を知的によく知っていましたが、好意を持ってはいませんでした。彼は妻の歓迎に、満足していなかったのです。

第百四十八話 まじめ

夫が妻より先に死のうとしたこと

フランシスコ・ペトラルカはある男について書いています。ある時、男

1 Nikolaus de Lyra (1270–1349), フランスのスコラ学哲学の神学者

は庭を散歩していました。そこには水のほとばしる泉がありました。彼と妻、それに他の者たちが泉の傍に座り、宴を張ろうと思いました。その時男の両手に、片手に雄、もう片手には雌、それぞれ一匹ずつの蛇がやってきて、手にぶら下がったままでおりました。男はひどく驚きました。その庭には占い師もいましたし、自分たちはこのことを重大事だと思っていたので、二匹の蛇の意味することを言うてくれるように、男は占い師に頼みました。そこで占い師は言いました。「それは重大なことです。初めに雌を殺せば、貴方より先に奥さんが死に、雄の方を打ち殺せば、奥さんより先に貴方が死ぬでしょう。」男は妻を大変愛していましたので、妻よりは先に死にたいものと思って、雄を打ち殺して、言いました。「私は年を取っており、いずれ今日明日にも死ぬことだろう。妻はまだ若く、まだ沢山の子供たちをもうけることができるし、その方がずっとみんなのためになるでしょう。」こうして男は一週間も経たない内に死んでしまいました。

「夫たちよ、キリストが教会を愛し、教会のためにご自身を捧げられたように、あなた方も自分の妻を愛しなさい」と、聖パウロは（エフェソの信徒への手紙 第五章）言っております。

第百四十九話 まじめ

妻を愛したことがなくて首を切られた男のこと

イギリスである男が行軍中に逮捕され、まさに首を切られようとした時に言いました。「俺は妻を愛したことがないということの外には、死刑になるような罪を犯したことはない。」

第十三章 魔法使について

第百五十話 冗談

土鍋がたぎり、袋が帰ったこと

ある時、沢山の商人が一緒に出かけて行きました。ある商人の妻が、老婆に一グルデン与え、夫が妻に従わなければならないようにする術を教えしてくれるように言いました。さらに夫たちが妻に従わなければならないように、夫の魂をとりこにできる術のことを聞いたのだけれど、と言いまし

た。老婆は彼女にその方法を教えてやりました。ある時その細君は、眉毛をくれるように夫に頼みました。妻が執拗に頼んだものですから、夫は言いました。「分かった。いずれ土曜日までに床屋へ行って、毛を受け取って、おまえに持って来てやろう。」ところでこの時代、人々は、矢筒のような長い毛のある袋を担いでいました。男はその毛を切って、小さな紙に包んで、妻に渡しました。

商人たちは出かけて行きました。夜、宿に着くと、かの商人は袋を壁に掛け、食卓につきました。家では妻がその毛でおまじないをしました。袋が壁で踊り始めました。他の商人たちは言いました。「見ろ。おまえの袋は何をしているのかい。」しばらくすると、袋はいっそうひどく暴れて、ついには壁から飛び下りてしまいました。商人は言いました。「戸を開けてやれ。恐らく奴は家へ帰りたいたいだろう。」袋は幾度も踊って、ついに家に帰り着きました。戸口に来ると、戸をノックしました。妻はすぐに走ってきて、夫が帰ったのだと思いました。それは夫の袋でした。そこで妻は騙されたことに気づきました。

さて夜が明けると、商人は家に帰って、哀れな妻をひどく殴りつけました。それで哀れな妻は、夫が帰ったのだということが分かりました。

第百五十一話 冗談

坊さんの前で十字を切った女のこと

ある時、老婆が朝早く教会へ行き、そこで一人の司祭に出会いました。すると老婆は体の前で六、八回十字を切りました。司祭は老婆に言いました。「どうしてあなたは私の前で十字を切るのですか。私は悪魔などではありませんよ。」老婆は言いました。「朝早く司祭様にお蓬いしますと、その日、何か嫌なことが起こらなかつたためしがないのです。」司祭は言いました。「今日だって変わりはないぞ。」そして老婆の頭を掴んで、汚物の中に投げ込み、足で踏みつけて、言いました。「もっと多くの事が起きるまでそう信じている。お前の信仰にあわせてそういうことになるのだ。」

第百五十二話 冗談

狼が馬を食ったこと

ある時、一人の百姓が馬に車を引かせて森へ行きました。馬には下男が乗り、主人は馬の後ろの棍棒の上に乗っていました。下男は言いました。「旦那、ほら、兎がわしらの行く手を横切って行きますよ。」主人はそれを見て言いました。「ひっかえそう、兎が横切ったんじゃあ、全くついていない。今日のところは何か他のことをすることにしよう。」

下男は引き返し、翌日出直しました。森に来かかったとき、下男は言いました。「旦那、狼がわしらの前を走って行きましたよ。」主人は言いました。「しかと見たぞ。こいつは吉と言うものだ。」二人は馬を森へ乗り入れ、馬を草地に繋いで、歩いて森に入り、薪を作りました。薪をつくってしまうと、下男はそれを積んで帰るために馬と車を取ってこようと思って行きました。すると狼が馬を倒し、食べているのを下男が見て、主人を呼んで言いました。「旦那、吉が馬に食らいついていますよ。」主人は下男に言いました。「なんということを言っているのか。」下男は旦那に言いました。「吉が馬に食らいついているんですよ。」旦那はわけが分からず、やってきて、狼が馬に食らいついて、食べているのを見ました。

またしても邪心のなせる技です。兎は馬など食いはしなかったでしょう。

第百五十三話 冗談

首に掛けた眼病のお守り札のこと

網目袋などを担いで遍歴しているような、世故にたけた、食わせものの学生が、とある一軒の家にやって来ました。この家には目を痛めている女が住んでいました。学生はその女に言いました。「もし私に一グルデン出す気があるのなら、誰にも見せないようにして、首に掛けておく限り、目が痛くならないようなお守りを上げようじゃないか。」女は嬉しがって彼に一グルデン差し出しました。学生はすぐにお守りを女に与え、それを首に掛けてやりました。

女はこのお守りを首に三、四年も掛けていたでしょうか。そんなある日

のこと、告解をした折りに神父が女に「迷信をしていないだろうね」と、訊ねました。女は言いました。「お守りを授かりまして、目の痛みに利くというので、やんごと無いお名前を首に掛けております。」神父は女を非難しようとは思いませんでした。そしてその後で、女にお守り札を読ませて貰いました。神父はそれを読むと、ワッハッハと笑いました。女は何故笑うのかと尋ねました。神父はそれを読みきかせ、女もまたそれを理解しました。まさにこんな事が書いてあったのです。「首切り役人がお前の目をほじくり出し、悪魔がその跡に糞をするが良い。」女はそのような事が書かれていたなど、思いもよりませんでした。だから、それを戴くと、三年、いや四年も身につけていたのであります。が、こうなっては神父の言葉を信じない訳にも参りません。それで女はお守り札を引きちぎってしまいました。すると彼女の両眼はまたしても痛み始めたのであります。

悪魔は束の間、病を中休みさせることができるのかも知れません。カイザースベルク博士の『蟻』を読んでごらん下さい。その中に報告が見えますよ。

第十四章 信仰について

第百五十四話 まじめ

ユダヤ人が、神様を肥溜めの中に求めねばならなかったこと

ある時キリスト教徒とユダヤ人が出会いました。話しの赴くままにユダヤ人はこう言いました。「あなた方キリスト教徒が、ご自分の信仰のうちにお持ちになる多くのことを、私は信ずることができます。但し神なる主がマリヤの内に宿られたなどと、あなた方が信じておられるのは別でして、そんな事は私には信じられませんな。」するとキリスト教徒は言いました。「何故でしょう。容易に信じられることですよ。あなたは神がどのような場所にでもおられるという事を信じないのですか。」ユダヤ人は言いました。「いや、それは信じます。」キリスト教徒は言いました。「神は石の中に宿られますか。」「ええ」と、ユダヤ人は言いました。キリスト教徒は言いました。「神は肥溜めの中に宿られますか。」するとユダヤ人は言いました。「ええ。」それを聞いてキリスト教徒は言いました。「お前さんなどは呪われる

が良い。神様が肥溜めには宿っても、純潔なる乙女マリヤには宿らぬとお
思いか。」彼はユダヤ人の首っ玉を掴むと、肥溜めの中に放り込んで言いま
した。「肥溜めに入って、中で神を探すが良い。」

第百五十五話 冗談

農夫が我が子を洗礼し、かつ、その倅が子牛を連れてきたこと

ある時、一人の農夫の所に子供が生まれましたが、緊急授洗をしなければ
ならなくなり¹、農夫は自らの手で洗礼を施しました。もし男子がその場
にあるときは、女子は洗礼を施すことは許されませんし、叙階された者、
もしくは神父がその場にあるときは、そのものが洗礼を受けるべきであり
ました。ともかく、なんびとたりとも、自分自身の子供に洗礼を施しては
ならないのでありました。さて子供は洗礼を受けると、もう死んでしま
いました。農夫は死児をへぎ板の棺に納め、神父のところに運ぶことにして、
上の倅に言いつけました。「牛舎の子牛に綱をつけて、後ろから連れて来
い。」農夫は子供を運んで来て、神父の許に参りますと、こう頼みました。
「神父様、この子を信者墓地に埋めてやってくださいまし。洗礼は俺がやっ
ておきましたから。」神父は言いました。「洗礼を施したとき、お前がどう
いう言葉を唱えたのか、私はそれを知りたいな。」農夫は言いました。「だ
から、俺は唱えたですよ。父と聖霊の名によって、俺はお前に洗礼を受け
るぞ。アーメンってね。」神父は言いました。「子はどうしたのだね。」農夫
は言いました。「倅なら後から子牛を連れて来ますだよ。神父様が子供を教
会墓地に埋めてくれるようなら、それを差し上げべいと思ひましてな。」神
父は子牛を受け取りました。子供は十分に清められていると彼には思えま
した。それで神父は子供を埋葬させてやりました。

第百五十六話 冗談

豚飼いが聖霊を信じなかったこと

ある時、一人の僧正が二十騎の供を引き連れて野駆けした折り、広野を

1 未洗礼の嬰兒などが死に瀕した場合など、緊急に洗礼をほどこさねばならな
いこともあった。

走り行くほどに、豚飼いが一人、杖に凭れて豚の番をする姿が目につりました。僧正は供の人々に言いました。「私はあの豚飼いと、宗論を交えねばならない。」僧正は馬を進めて豚飼いの所に行き、彼に挨拶し、語り掛けました。「そなたもキリスト教徒ですか。」「はあ、俺がキリスト教徒だからって、いけねえ事はありませんまい。」僧正は言いました。「そなたも父と子と聖霊の三位一体を信じていますか。」豚飼いは言いました。「俺は親父と息子のことは確かに信じていますよ。これらの豚はその人たちのものですからね。でも聖霊は信じませんや。俺たちの村にゃ聖霊なんて名前の者はいませんからね。」僧正は笑って言いました。「そなたの答は巧みであったぞよ。」

第十五章 思い上がりについて

第百五十七話 まじめ

コンスタンツィウス,¹ アーチの下で身を屈めること

一人の皇帝がおりました。名前をコンスタンツィウスと言い、小柄な男でした。皇帝たる者の務めとして、馬でローマへ行かねばならなかったのですが、さて、いよいよ馬を乗り入れると、ローマの市民たちは、当然のことながら、丁重な言葉で皇帝を迎えました。そのあと、皇帝コンスタンツィウスも、市民たちは賢明な人であって、自分に逆らう者は一人もいない、自分は皇帝たるにふさわしい人間である、と丁重に礼を言い、そして心にもないほめ言葉を並べ立てました。さて、ローマの町は、アーチや丸天井を通して勝利の馬を進めねばならないときは、その下を長い槍を真っすぐ立てて持って行けるように、造られていました。ところが、皇帝はあるアーチの下を馬で行くとき、首を屈めました。ローマの市民たちはそれを見て、皇帝を笑いものにしました。

コンスタンツィウス皇帝は大きな鷺鳥でした。鷺鳥の特性を持っていたのです。鷺鳥は納屋の戸口を入るとき、首を屈める。上にぶつかるのが気

1 Constantius Chlorus (250頃-306) か Constantius II (337-361) か。不詳。

になるのです。そして、普通、小柄な人々は真っすぐ直立して歩きます。気ぐらいが高いのです。男たちは三つの部分でできていて、頭には高い帽子を被り、高い木靴か短靴を履いている。三つの部分でできていて、下は木造り、上は毛造りです。¹ 女たちも真っすぐ直立して歩きます。人々は女たちに味方して、女たちは鶯鳥よりも一つ知恵が多い、雨が降れば、乾いた所へ行く、と言う。私は、女たちが鶯鳥よりも二つ知恵が多くなるように、もう一つの知恵を授けましょう。鶯鳥は納屋の戸口を入るとき、身を屈める。しかし、女たちはいつも真っすぐに直立して歩きます。女たちは白い鶯鳥で、頭に白いヴェールを被っているが、中はもちろん全くのちりあくた。男の中にも頭の白い人がいます。しらが頭、ごましお頭、墓場の花。² 頭の中も白（さかしら）³ ならばいいのですが。

第百五十八話 冗談

司教、百姓に言い負かされること

ある時、一人の司教が四十頭ほどの馬を従えて遠乗りをしていると、一人の百姓が畑にでてるのが見えました。百姓は鍬を休め、柄に凭れて、騎馬の人々を見ていました。司教は百姓の所へ行って言いました。「お前さん、正直に言ってみなさい。わしが一行を従えて遠乗りするのを見て、どう思ったか。」百姓は言いました。「旦那様、ヴェルツブルクの聖キリアン様⁴もそのように四十頭の馬を従えて遠乗りなさったのかな、と考えました。」司教は言いました。「わしは司教だけではなく、俗界の君主でもある。今ここにいるのは俗界の君主だ。司教に会いたかったら、聖母被昇天祭の日⁵にヴェルツブルクに来るがよい。そうすれば会える。」すると、百姓は笑い出しました。司教は、何がおかしい、と言いました。百姓は言いました。「もし君主様が悪魔に憑かれてもしたら、司教様はどうなさるんでしょ

1 hültzin と filtzin の語呂合わせ。「真ん中が胴体」で三つの部分になる。

2 古い諺で「老齡のごましお頭」の意。

3 原語は weiß。これも weiß と weise の語呂合わせか。

4 St. Kilian (640 頃-689 頃)。アイルランドに生まれて、ヴェルツブルグで処刑された聖者。

5 8月15日。

う。」司教は百姓の所から立ち去りました。こういう男はもうたくさんでした。

第百五十九話 まじめ

悪魔、自分で出て行こうとすること

ある時、悪魔に憑かれた人から悪魔を追い出そうとしました。悪魔は言いました。「おれは自分で出て行くよ。追い出されたなんて言われたくないからな。」

下女や下男のやり方もこれと同じです。暇を出されそうだと気がつくと、体面を保とうとして、自分で暇を取ります。こう言うのです。「ええ、これ以上勤めているのはもう嫌ですからね。」

第百六十話 冗談

ふしだらな女たち、互いに勤め口を代わりあうこと

ある時、一人の女がクリスマスの日に言いました。下女に暇を出してこう言ったのです。「お前、あしたはどういう日か知ってるかい。」下女は言いました。「聖シュテファン様の日¹です。」女は言いました。「違うよ。ふしだらな女たちが勤めを代える日だよ。」下女は言いました。「ええ、ふしだらな女の所へ次々とね。私今日はあなたの所にいますが、明日はあなたのお姉様の所にいます。」

第百六十一話 冗談

お前の親父は冠を被っていても王様ではない、と言うこと

ある時、司祭の息子が、これはまことに生意気で横柄な子でしたが、市民の息子と喧嘩をしました。散々悪口のやりとりをしたあとで、市民の息子が司祭の息子に言いました。「威張りくさって横柄な口をきくな。お前の親父は頭に冠を載せていても、お前はとても王様の息子なんかじゃないんだぞ。」

1 12月26日。

第百六十二話 冗談

国王，一足の上靴に一グルデン出そうとすること

イギリスに一人の王様がおりました。執事に「さあ、行って上靴を一足買って来てくれ。」と言いました。執事は一足の上靴を買って、持って来ました。王様は言いました。「値段はいくらだ。」執事は言いました。「四プラファルト¹でございます。」王様は言いました。「いまいまいしい奴だ。国王たる者がそういうけちな金の上靴を履くというのか。行って、別の一足を買って参れ。これはその方が取っておけ。」執事は行って、前と同じように一足買って来ました。持って行くと、王様は、値段はいくらか、と尋ねました。執事は「一グルデンでございます」と、言いました。王様は言いました。「これこそわしの物じゃ。」それは、前のと全く同じ上靴でした。それからというもの、衣類の値段は、執事が自分の好きなように見積もりました。

第百六十三話 冗談

窮屈な靴を履いた僧院長のこと

かつて自惚れの強い僧院長がおりましたが、この人は今日でもなお多く見かけられるような高慢な僧侶でした。当時一人の貴族がいて、教会からいくらか没収しようとしていました。僧院長はその土地の領主のもとへやって来て、貴族が非常に貧しい自分の教会に、どんなに損害を与えるかを嘆き、貴族が教会に手を出さないでおいてくれるよう、領主に説得してくれるように頼みました。領主は僧院長に謙虚さを教え、僧院長の高慢さを示してやりたいと思ってこう言いました。「僧院長殿、あなたの靴を見ると、大変窮屈で、足指がそのように互いに重ならないくらい、革が十分にある靴をお買いになれない程、あなたの教会が貧しいのだということが十分に見て取れますよ。」

今日履かれているような靴を人々が初めて履いた時には、靴は辛うじて足指を覆っているにすぎませんでした。もし靴がズボンに留め付けられて

1 原語 Plaphart。Blaffert と綴る。昔の小貨幣。

いなければ、靴は足にくっついていることはできないでしょう。そして、武装した兵士や他の世俗の人々が靴を履くように、今や僧侶や坊さんたちも靴を履きたがります。しかし、そのような靴を履いてミサを読むのは、僧侶には似合いません。かつては長いくちばし状の先端の付いた靴が履かれましたが、それを履いて歩くと、コツコツと音がしました。そして最も長いくちばしを付けた人が、一番伊達だとされていました。時として先端には一ポンドのぼろきれなどが詰め込まれていました。さて、今では靴先をいくら丸くしてもしきれない有様で、靴と言うよりは小牛の口に似ています。靴においても他の物のように中庸はあり得ないようです。

第百六十四話 冗談

二つの石臼を見せた男のこと

ある時、一人の貴族が自分の城から、友人であるもう一人の貴族の城へとやって来ました。そこで、主人は客に自分の宝石や、いくつかの宝石の付いた妻の指輪を持って来て見せ、友に誉めてもらいたいと思いました。ある物は三百グルデンの値打ちがあり、またある物は六百グルデンの価値がありました。客は長いことそれらの宝石を賛美して、言いました。「友よ、それらの石は長いことおいてあると、あなたにどんな利益をもたらしますか。」主人は言いました。「何の利益ももたらしません。」客は言いました。「それなら私はあなたに勝っています。私は二個の価値ある石を持っていますが、それらは私に毎年三百グルデン以上儲けてくれます。」そしてある時、宝石を見せた貴族がもう一人の貴族の所へ石を見にやって来ました。そこでその人は客を水車小屋に連れて行き、石臼を見せて言いました。「これらから私は一年間に先日言っただけ手に入れるのです。」

多くの人々が宝石を、それらがどんなに高価であるか賞賛します。宝石にはまさに評価されるだけの価値があります。それらは大きな権力と力を持っています。そして、自分の片目に一個の宝石を押し付ける人は、涙が出ます。フランシスコ・ペトラルカは、宝石は大きな力を持っている。いやそれどころか、金持ちたちがグルデン金貨を入れている、小びつや小袋を空っぽにすることができ、箱でも空にできるのだと言っています。多くの人々は、たった一個の石のために五千グルデン出しても、貧しい人々の

ために、神の楽園と引き換えに、神に五千ヘラーさえも出しはしないでしよう。

第百六十五話 冗談

アレクサンダーが駆けっこをしたがらなかったこと

アレクサンダー大王について読みましょう。少年であった頃、大王も草原へやって来ましたが、そこでは若い貴族や、市参事会員の息子たちが、駆けっこをして皆で楽しく遊んでいました。その時、アレクサンダーは言いました。「ああ、もしあれらが皆、王の子供たちであったらなあ、そうしたら一緒に駆けっこをしたいものだなあ。」

アレクサンダーが、自分より身分の低い者たちとは駆けっこをしたがらず、自らをより身分が高く、立派すぎると見なして、自分と同等の者たちと駆けっこをしたいと思ったのは、一種の良い高慢でした。つまり、臣下に対してあまりにも親しくし過ぎること以上に、何が軽蔑をもたらしましょうか。領主も時には遊び人や市民と一緒に賭博をして遊ぶし、騎士は馬丁と、御婦人方は殿方と遊んだりします。各人が自分と同等の者たちを求めるべきです。

第百六十六話 冗談

誰にでも愛想の良かった皇帝のこと

誰とでも話をしたローマの皇帝について読みましょう。この皇帝は誰にでも気さくで、路地で子供たちと語り合いました。ある時、一人の騎士が皇帝に言いました。「殿、あなたは御自分を台無しにしておられます。人々に軽んじられるようになさっていらっしゃいます。何故あなたは、誰にでもそんなに愛想良くなさるのですか。」皇帝は言いました。「わしは、もしわしが彼らのようであったとしたら、皇帝がわしと一緒にいてくれたら良いと思うので、誰とでも喜んで一緒にいてやろうとしておるのだ。」

この皇帝は良い考えも持っています。あるいはひょっとしたら、そのことで賞賛されたいと思う謙虚さのその中に、一種の高慢な気持ちを持っているかも知れません。あの賢者¹はこの皇帝についてこう言っています

1 ペトラルカのこと。

す。「あなたが皇帝，すなわち長であるのなら，誰をも軽蔑せず，彼らの間で彼らのうちの一人としてあれ。」

第百六十七話 冗談

キリスト教徒を迫害したドミティアヌス¹のこと

時として独居，孤独が高慢であるという場合があります。例えば，私たちがドミティアヌスという名の皇帝について読むように。この人は，皇帝はローマの公共の利益のために，何か考え事があるのだと思われるように，毎日何時間か一人でいました。そしてその時間には，誰も自分のもとへは来させませんでした。皇帝の下僕たちは，彼が一人でいる時にいったい何をしているのか，是非とも知りたと思いました。下僕たちは天井に一つの穴をあけて，皇帝が何をしているのか覗きました。その時下僕たちは，彼が一本の尖った木片を作って，壁に蠅を捜し，見つけるとそれらを木片で刺し殺すのを見ました。それは皇帝の仕事の一つ，蠅突きでした。この蠅突き王は，キリスト教信仰において第二番目の迫害を行いました。ネロが最初の迫害を，ドミティアヌスが第二の迫害を。ある時，ある人がやって来て，皇帝は何処におられるかと尋ねました。人々は，皇帝は御自分の部屋におられると言いました。それでその人は，皇帝は一人でおられるのかどうか尋ねました。人々は，「はい，お一人でおられます。お側には蠅一匹いません」と言いました。これでもって彼らは，「皇帝が蠅を皆突き殺してしまった。それ故にお側には誰もいないでしょう」と言って，皇帝を侮辱したのです。

御婦人方が，例えば結婚式や，最初のミサに招かれているのに，彼女らが思うに，自分たちと同等の人たちがそこへ来ないというので，出席しないで家にいるというのもまた御婦人方の高慢です。しかし，自分たちよりも金持ちで，身分の高い婦人たちがそこへ来るとなると，彼女らは，自分たちもそのような金持ちの，高貴な人々のもとに招かれているのだなどと自慢できるので，喜んでやって来たがるものです。

1 Domitian, Titus Flavius (AD. 81 - 96), ローマ皇帝。